

Monthly Report

Vol.155 / 2019 .MAR

第49回 仙台大学体育学部卒業証書・学位記授与式並びに第20回大学院学位記授与式」が挙行されました



答辞を述べる本間桃花さん（運動栄養学科）

3月16日（土）、第五体育館にて「第49回体育学部卒業証書・学位記授与式並びに第20回大学院学位記授与式」が挙行され、今年度は体育学部561名（うち、国際交流締結大学である台東大学（台湾）とのダブルディグリー制1名）の卒業生と大学院12名の修了生が社会に巣立ちました。

遠藤保雄学長は学長告辞で「君たちが巣立つ不確実性の日本社会、それは、君達にむしろ日本のニュー・フロンティアへの挑戦を準備している。なぜなら、君たちは、問題に「体」を張って取り組み、感性豊かな「心」でぶつかり、勝つための「技」を、身のこなしの中で展開し、この日本社会に進むべき道を示し得る力を持っているからだ。飛び立て、大きな羽を広げ、不確実性に覆われた日本社会へ！」と挨拶されました。

朴澤泰治理事長・学事顧問は「今、みなさんの「情報センサー」では、最もインパクトのある出来事は何であると捉えているのでしょうか。『平成』の次の時代を創り上げていく担い手は、本日、卒業を迎えたみなさんであります。それだけに「みなさんの情報センサー」、そして、センサーの向く方向は、非常に重要となります。『建学の精神』の下で、学業生活を終えられたみなさんは、次に時代の創造の担い手として、必ずや期待に応えてくれるものと確信しております。大いに自信を持って社会に船出をして頂きたいと思えます。」と卒業生と修了生へ向けはなむけの言葉を送りました。

卒業生を代表し、運動栄養学科の本間桃香さんは「思い起こせば今から4年前、私たちは初めて会う仲間とともに、これから始まる新しい生活に大きな期待と不安を抱き、仙台大学の門をくぐったことを覚えております。仙台大学で過ごした4年間は学科の垣根を越えて多くの人と出会い、多くの学びがありとても充実したものでした。仙台大学の4年間でスポーツ栄養に関する専門的な知識や技能を身に付けることができました。」と答辞を述べました。

式中には学生表彰式も行われ、U-23ボート男子日本代表で漕艇部の一瀬卓也さんなど19名が学長賞を受賞したほか、スポーツや文化活動などにおいて優秀な成績を修めた学生に、スポーツ功労賞、文化功労賞、日本介護福祉士養成施設協会会長賞、全国栄養士養成施設協会会長賞、JPSU認定スポーツトレーナー資格取得者表彰、同窓会賞などが授与されました。

〈 目 次 〉

・第49回 仙台大学体育学部卒業証書・学位記授与式並びに第20回大学院学位記授与式」が挙行されました	1
・仙台大学大学院開設20周年を祝う会を開催しました ・「平成30年度 介護実習・社会福祉援助技術現場実習 教育懇談会」を開催しました	2
・平成30年度 学生相談室主催 教職員研修会「発達障害学生への理解と支援」を開催しました ・第6回全国ブロック大学男子バレーボールチャンピオンマッチ報告	3
・平成30年度 陸上競技部投てきブロック春季強化合宿 in 台湾台東 ・本学0Bの小林翔汰さんが柴田町役場スポーツ振興課に配属が決まりました	4
・遠藤学長、「東北こども博」の協賛会社、トヨタ自動車東日本（株）様を訪問、白根社長と面談 ・首都圏就職一日弾丸ツアーを実施しました	5
・高校生のための仙台大学「教師塾」を実施しました ・「3×3.EXE GAME in仙台～小学校卒業記念大会」にバスケットボール部が補助スタッフとして参加しました	6
・平成30年度学支支援ボランティア感謝状贈呈式を開催しました ・平成30年度 健康福祉研究会を開催しました	7
・子ども運動教育学科の上海保育実習	8
・通算28回目 ハワイ大学アスレティックトレーナー研修ピギナーコースを実施～学生たちによるハワイTV出演・ハワイ報知新聞取材～	9
・「高校スポーツの安全を守る」Vol.12 ・「平成30年度(後期)健康づくり運動サポーター認定証書授与式」を開催しました	10

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

仙台大学大学院開設20周年を祝う会を開催しました



仙台大学大学院開設20周年を祝う会の様子

2月16日（土）「仙台大学大学院開設20周年を祝う会」が本学で開催されました。退職された先生方や中国からも修了生が駆けつけて下さり総勢140名の方々にご参加頂きました。

第1部の研究集会では、初めに遠藤保雄学長よりご挨拶を頂き、続いて藤井久雄大学院研究科長から「仙台大学大学院20年間の歩み、そして未来」と題し、これまでの様子等を写真で振り返りつつ、大学院のこれからについてお話を頂きました。

基調講演では、東京大学大学院総合文化研究科 深代千之教授より「体育・健康、スポーツ分野の高度な専門指導者育成に求められる大学院の役割」についてご講演頂き、また研究発表では、本大学院修了生の日本オリンピック委員会マーケティング部 脇本昌樹係長「自国開催を迎えるJOCでの活動について」、同じく本大学院修了生の東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系 神野周太郎特任講師「身体活動における「際に立つ経験」の展望」というテーマで発表を行って頂きました。

研究集会終了後、第2部の意見交換会が学生食堂（25記念館）で行われました。当時の思い出やこれからの仙台大学について語り合い、「大学院開設20周年を祝う会」は盛会裏に終わることができました。

<報告：大学院事務室>

「平成30年度介護実習・社会福祉援助技術現場実習 教育懇談会」を開催しました

2月14日（木）14時30分より、仙台ガーデンパレスにおいて、「平成30年度 介護実習・社会福祉援助技術現場実習 教育懇談会」を開催しました。

この教育懇談会は、介護福祉士養成のための介護実習と社会福祉士養成のための社会福祉援助技術現場実習の実習施設指導者へ、今年度の介護実習と社会福祉援助技術現場実習の実習結果及び学生の学びについて報告し、次年度の実習計画について提案させていただきながら、施設実習指導者より実習についてのご意見を伺い、次年度の実習についてご理解とご協力をいただくことを目的としています。

今回、13施設の実習指導者にご参加下さり、平成30年度の実習報告ならびに平成31年度実習計画の報告後、教員と実習指導者と、「学生が実習目標を達成するために、実習指導者と教員双方が、工夫する点、かかわり方」などについて意見交換を行いました。実習指導では、学生の主体性を引き出すために、指導者や職員の皆様が声掛けの工夫をしてくださっている様子や、実習が学生にとって良い体験となるようご配慮をいただいているということが伺えました。仙台大学では、健康づくりをリードできる人材の育成をベースに教育していることや、大学の授業での工夫ならびに課題について、また、介護の人材確保の問題や、地域に開かれた施設の在り方など多岐にわたる意見交換ならびに情報を共有し、大変有意義な時間を過ごすことができました。実習指導者と教員の連携が重要であるという共通理解もさらに深まり、これからも実習指導者と教員との連携を密にして、よりよい実習ができるようにしていきたいと考えております。

また、仙台大学では、スポーツを続けながら、介護福祉士国家試験受験資格や社会福祉士国家試験受験資格の他、養護教諭、保健体育教諭、特別支援学校教諭、福祉科教諭を目指す学生が多く学んでおります。様々な年代の人々に教育・医療・福祉の各分野で健康にかかわる指導者を育成し地域の人々の健康に貢献できる人材育成を目指しています。学生が大学で学んだ仙台大学の強みや特徴を、実習でも発揮できるよう支援していきたいと考えております。

<報告：篠原真弓准教授>



挨拶を行う遠藤保雄学長

平成30年度 学生相談室主催 教職員研修会「発達障害学生への理解と支援」を開催しました



研修会の様子



黄淵熙先生

3月5日（火）LC棟1階にて、平成30年度学生相談室教職員研修会を開催しました。今回は教職員の事前アンケートによる要望が最も多かった発達障害を取り上げ、「発達障害学生への理解と支援」をテーマに、東北福祉大学教育学部の黄淵熙先生より、ご講演をいただき、教職員と教員を志望する学生、併せて36名が参加しました。黄先生は発達障害児の学習困難に対する教材開発や指導方法を専門的として教育研究活動に取り組んでいるだけでなく、大学で発達障害を抱える学生を支援し、学習面、生活面での支援や保護者との面談も行っています。

講演では、発達障害を抱える学生への支援についての法制度に加え、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）について、それぞれの特徴と対応方法についてご説明いただき、発達障害学生が大学生活で出会う困難さや、それに対する具体的な支援策についても、研究や実践活動に基づいたお話をいただきました。

内容として、発達障害と一口に言っても、本人がどのような場面で困難を感じ、どのような支援を必要としているかは様々であるため、学生本人や保護者との面談を通じた困り感の聞き取りと支援策の調整が重要であることのほか、発達障害学生は見通しを持つことが苦手で、適切な時間配分による授業選択や抽選による登録といった変則的な履修が難しい結果、必修科目を取りこぼしてしまう場合もあるため、友人や教職員などと一緒に確認しながら履修を登録する必要がある、それは発達障害学生に共通して見受けられるとのご説明でした。そのほか、講演で取り上げられた授業場面や生活面での支援についてご紹介され、発達障害学生に対し、視覚・聴覚両方から情報を提示することが理解の助けになるため、言葉による説明に加え、図表を用いるなどの視覚的な資料を併せて提示すること、健全な学生よりも集中しすぎてしまい、時間を忘れて目の前のことに没頭してしまうため授業に出られない、昼夜逆転の生活に陥ることもあり、そうした事態を防ぐためには周囲の声掛けによる時間管理が必要であるとのことでした。

本研修会は大学で発達障害を抱える学生を支援している講師から、その実際をうかがえたことで、困難場面やその対応は具体的でイメージしやすく、非常に学びの多いものとなりました。発達障害を抱える学生がどのような場面で困難さを感じるのかを理解し、授業への配慮や支援方法を考えること、学生および保護者だけでなく、関わる教職員と情報共有や情報交換を継続的に行うことの重要性を認識しました。予定していた時間を超過してまで多くの質問が挙げられ、研修会後のアンケートで参加者から「発達障害やその支援に対する理解が深まった」「具体的に分かりやすかった」という感想をいただきました。

何らかの障害を持つ入学生は年々増加しており、発達障害を抱える学生の割合も増加傾向にあると言います。本研修会が本学において、障害を持つ学生の理解や支援を検討する一助になればと考えています。

<報告：学生相談室>

第6回全国ブロック大学男子バレーボールチャンピオンマッチ報告

男子バレーボール部は3月11日から14日まで福岡市民体育館で行われた第6回全国ブロック大学男子バレーボールチャンピオンマッチに出場し、予選リーグは4勝5敗で8位、決勝リーグは1勝3敗6分で9位という結果となりました。

新チームとなり初めての大会で、結果としては満足のいくものではありませんでしたが、その中でもキャプテンの高橋生祈（スポーツ情報マスメディア学科 3年）が優秀選手賞を受賞しました。今大会を皮切りにさらにチームのレベルアップを図っていきます。

4月から開幕する春季リーグ戦に向けて今大会で課題や改善点を克服し、チーム一丸となって頑張りたいと思います。

今後とも男子バレーボール部の応援のほどよろしくお願いいたします。

<報告：男子バレーボール部>



男子バレーボール部

平成30年度 陸上競技部投てきブロック春季強化合宿 in 台湾台東大学

陸上競技部投てきブロックは平成31年3月1日（金）から8日（金）まで、台湾台東大学及び台東大学付属高校において、本年度で3回目となる強化合宿を実施してきました。

参加者は26名（指導者2名、選手24名）と昨年度よりも多くなりましたが、台東大学の范先生をはじめとするたくさんの方々に協力をいただき実施することができました。本合宿の目的は温暖な地において、2019年シーズンに向けて効率の良いトレーニングを実施することですが、国内では砲丸投げ、円盤投げ、ハンマー投げ、やり投げの全種目の投てき練習を陸上競技場内のフィールドで認める施設はほとんどありません。しかし、台東大学付属高校は全投てき種目が自由に練習できる陸上競技場やトレーニングルーム、食堂、宿舎のすべてが徒歩5分以内にあり、私たちにとって最高の環境を提供していただいています。そのような環境でトレーニングできることを幸せに思いながら、1週間の強化合宿に取り組んできました。



今回の合宿も「投げる」トレーニングを中心に組み立てましたが、新しい取り組みとして、「ウエイトトレーニング」を充実させることができました。私たちの競技は大きなパワーを必要とし、日々のトレーニングにウエイトトレーニングを積極的に導入していますが、施設内には立派なリフティング場があり、今回はそこでのトレーニングが実現しました。また、オリンピックを輩出したリフティング部の専属コーチからスナッチやクリーン等の基本動作についての指導もいただき、選手たちは投てき動作とリフティング動作の関連について良い学びがあったようです。コーチが用いていた言葉が英語であったため、はじめは受け身の姿勢も見られましたが、活動を重ねる中で積極的に英語を用いる選手も増えて、良い国際交流となったと同時に、体験を通して英語の必要性を改めて感じる選手がたくさんいました。



天候にも恵まれ、予定以上の良質なトレーニングを行い、全員無事に帰国することができました。ご協力いただいた台東のみなさんに感謝しつつ、本合宿の成果が来るべき2019シーズンの良い結果へとつながるよう、今後もチーム全体で目標に向かい進んでいきたいと思えます。

<報告：陸上競技部 投てきコーチ 宮崎利勝講師>

本学OBの小林翔汰さんが柴田町役場スポーツ振興課に配属が決まりました

本学スポーツマスメディア学科卒業生の小林翔汰さんが31年度4月より柴田町役場に内定し、スポーツ振興課に配属先が決まりました。

小林さんは本学卒業後、柴田町体育協会、柴田町総合型地域スポーツクラブで働きつつ、柴田町役場の内定を目指し、公務員試験勉強をしてきました。今回の内定を受け、「これまで仙台大学や柴田町体育協会、柴田町総合型地域スポーツクラブで学んだことを活かして今まで生まれ育った柴田町に恩返しをしたい」と意気込みを話してくれました。



小林翔汰さん

「東北こども博」の協賛会社 トヨタ自動車東日本（株）様を訪問し白根社長と面談

遠藤学長から白根社長への東北こども博へのご支援の御礼

3月7日（木）、毎年、東北こども博でご出展のご協力を頂いているトヨタ自動車東日本株式会社様（宮城県黒川郡大衡村）を遠藤学長が訪問し、白根社長とご面談する機会を頂きました。

遠藤学長の訪問は今回が初めて。冒頭、ご多忙の中、応接いただいた白根社長に対し、これまで8年間続いている東北こども博の際に、毎年、2万人もの来場者を頂いていること、特に、展示いただいているトヨタの自動車は子供たちが列をなしての大人気！運転席に我先に座ってクラクションを鳴らしたり、アクセルとブレーキを交互に踏んで感触を楽しんだり、子どもたちの車への興味を誘っていることを報告しました。そして、2019年度も引き続きご支援、ご協賛をお願い申し上げ、白根社長からは今後も支援協賛に前向きに検討していきたい旨の温かいお言葉を頂きました。

多忙な中、震災支援など多面的なご活躍を展開する白根社長

白根社長からは、トヨタ自動車東日本（株）としても、また、社長ご自身も大震災の復興関係の委員等を務められ、引き続き東日本大震災の復興支援にご尽力されていることのお話を頂き、更にハンドボール部は全国実業団の大会での強豪であり、その育成強化に力を入れていること、ラグビー部の顧問を経験されていたトヨタ自動車（株）勤務時代には、競技スポーツへのご苦勞をされておられたことなどの話を頂き、スポーツ分野での産学連携へと話題が広がるなど、極めて有意義なお話を頂きました。

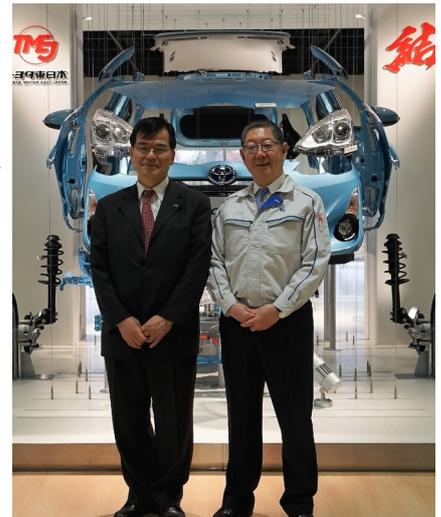
先端企業での“日本古来の「からくりの技法」をふんだんに使ったの品質改善”

その後、工場見学の機会を頂き、シエンタやカローラの生産ラインを見学させて頂き、生産現場では、かの有名な「カイゼン」への取り組みの中、現場の従業員の発案による“日本古来の「からくりの技法」をふんだんに使ったの品質改善と働き方改善の視点での製造工程の手直し”や付加価値重視へのたゆまぬ努力、従業員の人材育成を大切に考える社風を感じ取る機会となりました。これらのトヨタウェイは、本学においても十分に学ぶべき点が多く、もっと効率的な大学運営に向けた「カイゼン」意識を教職員全員が日々持てるよう、意識改革に活かせると感じさせる体験でした。

地域の産業界とのスポーツ健康科学分野での交流の必要性

我々のシーズである、運動による健康づくり、競技スポーツのパフォーマンス向上等のスポーツ健康科学の領域で、今後、地元根付くトヨタ自動車東日本（株）様はじめ、産業界の皆様とWin-winの関係を築くためにも、交流の必要性を感じる実りある会社訪問となりました。

<報告：学生支援センター>



<トヨタ自動車東日本（株）様PRホール「結ギャラリー」にて。右側が白根社長>

首都圏就職一日弾丸ツアーを実施しました

3月3日（日）に首都圏就職一日弾丸ツアーを開催しました。

本学3年生への就職支援の一環として、保護者会からの援助を受け、首都圏で開催される就職イベントに参加するという企画です。事前に2日間にわたる事前指導を受けた上で、いざ本番の合同企業説明会に参加します。今回は体育学科15名、健康福祉学科3名、運動栄養学科4名、スポーツ情報マスメディア学科10名、現代武道学科1名、計33名が参加し、昨年を10名上回る過去最高の参加人数となりました。

当日は仙台駅に8時30分に集合し、新幹線と中央線・総武線を乗り継ぎ水道橋の東京ドームプリズムホールに向かいました。合同企業説明会は12時から17時までの5時間でしたが、一人あたり約5～6社の説明会に参加した後、株式会社文化放送キャリアパートナーズの谷田氏より、今日の経験を今後どのように活かしていくかについて講義が行われ、学生たちは真剣に耳を傾けていました。

講義終了後は首都圏学生との交流会を実施し、早稲田大学4名、明治大学2名、日本女子体育大学4名のいずれも就職に意識の高い学生10名と、貴重な情報交換の場となり、お互いに初対面とは思えないくらい盛り上がりました。また、学生たちは互いに連絡先を交換し合うなど終始和やかな雰囲気でした。

参加した学生からは、「首都圏の学生にとっても刺激をうけ、自分に足りないもの等を認識でき、新たな気持ちで就職活動に取り組める」との意見も聞かれ収穫の多い一日となりました。

<報告：入試創職室 中鉢・鈴木>



高校生のための仙台大学「教師塾」を実施しました



ダンス実技指導の様子



青沼副学長講座

3月12日（火）9：00～13：40まで、「教師になろう」という高い志をもつ高校生に対し、その思いの実現に向けた教育活動支援を行う『高校生のための仙台大学 教師塾』を開塾しました。

当日は、明成高校や柴田高校など県内7校から34名の高校生が参加し、午前に講義、午後に体育実技（ダンス、バレーボール）を行いました。午前の講義は遠藤学長の「先生の魅力とは何か」と題した講話があり、次に青沼副学長から『「教える」ってどんなこと』と題した講座を行い、その中で教員採用試験に合格し4月から教鞭をとる4年生による講義を行いました。青沼副学長の講座では、「教員のタイプは様々あり、ただしゃべる教師もいれば自らやって見せる教師もいる。しかし、本当に優れた教師は生徒の心にやる気の灯をともすのです。」と教員を志す受講生に教員の在り方について話をさせていただきました。午後は、山梨講師がダンスの振り付けの難しさや体を使って表現する楽しさを指導し、その後、井上教授の指導のもと、鈴木貴之職員とバレーボール部の補助学生16名がバレーボールの基本や教員採用試験における実技試験の内容を取り入れて実施しました。お昼は学生食堂で教員や補助学生と一緒に昼食懇談会を行い、受講生には仙台大学での大学生活の一端を経験していただきました。

受講生からは、振り返りシートにおいて、教師塾への希望としては「勉強になる授業だったので今後も続けてほしい。」、「この授業で教師になりたい気持ちが強くなりました。」また、体育実技を体験してみての感想においては、「とても楽しく参加することができ、初対面の人とも一緒に踊ったり、プレーしたりできてよかった」などの意見が寄せられました。

今後も、教職支援室では引き続き教員を志す高校生等への支援などを図ってまいります。

<報告：教職支援室>

「3×3. EXE GAME in仙台～小学校卒業記念大会」にバスケットボール部が補助スタッフとして参加しました



ゼビオアリーナ仙台にて補助スタッフとして審判をする学生達

3月21日（木）ゼビオアリーナ仙台にて、「3×3. EXE GAME in仙台～小学校卒業記念3×3バスケットボール大会」が開催され、男子バスケットボール部、女子バスケットボール部の学生10名が試合の審判や運営など補助スタッフとして参加しました。

この大会は

- ① トップアスリートが試合を行う同じ場所で、プレーをすることで卒業の思い出としてもらうこと
 - ② バスケットボール(3×3)の楽しさを改めて感じてもらうこと
 - ③ バスケットボール(3×3)という共通のツールを通して、親交を深めてもらうこと
- の3つを目的として、ゼビオアリーナ仙台と宮城県バスケットボール協会が主催し、朴沢学園も協賛として、CM放送やブース出展をしました。

大会は52チーム、約700名が来場され、白熱した試合に多いに盛り上がりました。

平成30年度学校支援ボランティア感謝状贈呈式を開催しました



記念写真



表彰の様子

3月13日（水）第5体育館2階大教室にて、学生支援センター主催「平成30年度学校支援ボランティア感謝状贈呈式」を開催しました。

この贈呈式は、仙台市、名取市、岩沼市、柴田町の各教育委員会の方々、学校支援ボランティアを行った学生を対象に、感謝状を贈るための贈呈式で、今年度活動した主な学校支援ボランティアの内容は、上記4市町の幼稚園、小中学校を対象に子どもたちの勉強を支援する学習支援、陸上記録会の運営補助などの学校行事支援、部活動を指導する部活動支援などのボランティアを本学生が活動してきました。今年度は延べ139名が活動し、その内25名が式に参加、各教育委員会の方から学生に対し感謝状が贈呈されました。教育委員会の方々から、「仙台大学の学生は子どもたちにとって憧れなので、それを自覚し、行動してほしい」「子どもたちと年齢が近いので教師の目が行き届かないところまで、気付いてくれた」「子どものことを第一に考えた問いを非常に意識していることが良かった」など、学生に対し大変高い評価を頂きました。贈呈式に参加した大森春花さん（運動栄養学科2年）は、「今年度、私は学校栄養士の業務補助のボランティア活動を行いました。作業中、栄養士の方のお話から、給食運営における人手不足やアレルギーを持つ児童が増えたことによる栄養士業務の複雑化などを知ることができたのがボランティアを通しての大きな収穫です。これからの栄養士に何が求められるかを考えるきっかけとなりました。私は将来、小学校や幼稚園などで栄養士として働き、食の面から子供の成長に寄り添える仕事がしたいと考えています。その為、来年度もこの活動を継続し、栄養士さんのサポートをしながら自分の経験と知識を深めていきたいです。また、このボランティアだけではなく他の様々なボランティア活動を経験し、視野を広げていきたいと思います」と話していました。

学校支援ボランティアは将来教員を目指す学生にとって、普段の授業では味わうことの出来ない子どもとの触れ合いや指導することの難しさなど、実際の教育現場でしか味わうことの出来ない様々な経験をすることが出来ます。今後もより多くの学生を教育現場にボランティアとして派遣し、学生たちが将来の夢である教員という職業に就くための手助けとなるよう尽力して参ります。

<報告：学生支援センター>

平成30年度 健康福祉研究会を開催しました

「健康福祉研究会」は、介護や福祉・健康づくりなどの現場に勤める方々と、健康福祉学科の卒業生・在学生・教職員が相互に学習研鑽できる環境づくりの構築を目指し、平成16年度より開催してまいりました。

第13回目を迎えた今回は、「仙台大学発 介護福祉士養成を探る」をテーマに掲げ、平成30年3月9日（土）14時より、LC棟1階で開催し、卒業生16名、在学生32名、教員14名の計62名と多くの皆様にご参加をいただきました。

介護における最新情報として、本学の堀江竜弥講師より「我が国の介護福祉士養成の方向性と課題（カリキュラム改定、介護の高度化）」の発表と、卒業生のキャリアの動向について中間報告、福田伸雄講師より「介護ロボットの活用について」、後藤満枝准教授より「外国人労働者の受け入れについて」発表がおこなわれました。

介護福祉領域の実践からは、本学卒業生の特別養護老人ホーム萩の風 施設長 田中伸弥氏（平成15年卒）より「パラダイムシフト-地域ケアの垣根を超える-」と題して、地域福祉における先進的な実践のご発表と、施設にお勤めの外国人ケアワーカーの活躍についてご報告がありました。また、本学卒業生の介護老人保健施設 歌津つつじ苑 介護職員の三浦将詞氏（平成27年卒）より、「歌津つつじ苑における介護ロボット導入の効果について」と題して、平成29年度宮城県ロボット等介護機器導入支援事業の「見守り支援ベッドシステム」導入の実践報告をいただきました。

質の高い介護人材養成、人材確保という社会のニーズに対し、人間の身体の専門知識を持つ人材養成ができる仙台大学介護福祉士養成がどうあるべきか、保健医療福祉領域で先進的な実践でご活躍されている卒業生の皆様と一緒に、実践と教育研究との共同研究の必要性を感じる研究会となりました。

<報告：健康福祉学科>



記念写真

子ども運動教育学科の上海保育実習

平成31年2月27日～3月6日にかけて、海外保育実習および中国の幼児教育、保育の実態把握のため、上海体育学院並びに上海市に所在している日系幼稚園、中国幼稚園、保育所、蘇州市の幼稚園の視察を行いました。本学からは、朴澤理事長・学事顧問、久能学科長、馬准教授、金准教授、子ども運動教育学科の1年生5名が参加し、菊池さん（仙台大学の卒業生・上海体育学院博士課程）に現地での案内して頂きました。

子ども運動教育学科の学生が初めて海外保育実習を行った場所は、1996年に開園した上海美しが丘モンテッソーリ幼稚園です。この幼稚園は、日本人の子どもを対象とした幼稚園であります。園内での会話は日本語・中国語を両方使うのが特徴でした。一日の保育実習は、参加学生が年年少、年少、年中、年長クラスに分かれて、担任の先生と共に子どもたちの登園から降園までモンテッソーリ教育や外遊びに関わりました。

参加学生の感想は、「日本の幼稚園と比較して園内の遊具の配置や教育プログラムの違うところが多かった。中国のイメージは、余りよくないニュースが先行して良いイメージではなかったが、実際に来てみると中国の素晴らしさを体験する事が出来た」など熱く感想を話しました。実習を終えて、森副園長から「日本から来た子どもたちが、家庭の環境・社会の環境により、自立性・社会性・体力低下が予想されるので、日・中比較調査の必要性があります」、「日本人の保育士の海外への挑戦を期待しています」という言葉が印象的に残っています。短い期間ではありましたが、子ども運動教育学科の学生が、今後グローバル的な感覚を有する幼児教育者・保育者になる貴重な経験をさせてもらいました。



上海Yangpu Red Balloon 幼稚園は、上海市の中でも、富裕層が住んでいる地域にあるため、子どもが生活しやすい環境でした。この幼稚園には、1つのクラスの定員は20名ですが、先生の数は3人体制で（英語圏の先生、中国人先生：担任、副担任）英語教育が充実されているほか、園内で多様な種類の運動あそび器具が多く配置され、子どもがどこでも手軽に運動あそびができる環境が素晴らしかったです。この他、上海滞在中、複数の保育・幼児教育関係施設の視察も実施したので、今後の子ども運動教育学科の教育研究の運営に役立てていくことと思われます。



上海体育学院と仙台大学とは、これまで大学院留学生受入・交換留学、教職員間の研究の交流を行って来ましたが、今回の保育実習を目的とした短期研修派遣は初めてであり、陳院長からは、子どもを対象とした研究やプログラムを通じて、両校の交流がより一層発展することを願うとの話がありました。今後、定期的なサッカー試合や中・長期の単位交換留学制度の実現など、さらに交流を拡充していくことを確認しました。



上海体育学院の陳院長と朴澤理事長・学事顧問



国際卓球博物館

< 報告：金賢植准教授 >

通算28回目 ハワイ大学アスレティックトレーナー研修ビギナーコースを実施 ～学生たちによるハワイでのTV出演・ハワイ報知社取材～



2月27日ハワイのテレビ局01eo Community Mediaにて



3月1日ハワイ大学関係者と共に研修のクロージングの様子

2月25日～3月5日の日程で、ハワイ大学（以下UH）アスレティックトレーナー研修（以下AT）ビギナーコースがハワイ大学で開催され、1年生の学生9名が参加し、江尻雅彦教授、山口貴久准教授、佐藤美保広報室長、内野洋材助手が引率しました。本研修は、ビギナーコースとアドバンスコースとに区分され、先進的専門技能や知識の習得を目的として、年2回ハワイ大学と本学との提携により行われ、2003年12月を皮切りに今回で通算28回目を迎えました。

今回参加した学生は全員がアスレティックトレーナー部に所属するなど例年にはない顔ぶれで、学内での学びや実習等の成果もあり、1年生ながら高い意識を持って研修に参加することができました。その結果、UH関係者からは優れた評価と同時に、将来を期待するメッセージを頂きました。

研修中はUHの学内での講義、ATルームの実際の様子、ベースボールやバスケットボールの試合観戦、さらにはマッキンリー高校での見学を通して、ATの動きや役割など多くのことを学ぶことができました。

研修中には本学を卒業した村上泰司さん（卒業後、NATA-ATC取得のためUH大学院に在学中）が帯同し、あらゆる場面で親身なアドバイスを惜まず、学生たちのお手本として大いに協力してくれました。

今回研修の目玉のひとつ、80歳を超えながらハワイにおける健康体操の第一人者でMurata教育学部長のご母堂であるFaye Murata氏の「Faye's 元気体操」というテレビ番組に学生たちがオリジナル体操で出演し、NGなしで高齢者むけの体操を披露し無事収録を終えることができました。その模様は4月と5月の毎週木曜日に4回づつ現地放送されることとなりました。

また、Hawaii Houchi（ハワイ報知社）をUHマノア校Dr.Nathan Murata教育学部長、同教育学部の田村薫里准教授、仙台大学江尻雅彦教授、山口貴久准教授、佐藤美保広報室長、Faye Murata氏で訪問し、学術交流の一環で行われている「アスレティックトレーナー研修」について、交流までの経緯や研修内容を説明しました。特に、UHの田村薫里准教授からは、「日本ではATについての認知度が低い現状である。仙台大学のATに関する考え方、知識、設備等は日本ではトップクラスなので是非日本をリードしてほしい」との期待を寄せられました。また、Dr.Nathan Murata教育学部長からは、「仙台大学との交流をさらに充実させるためには、今後とも最大限の協力を惜しまない」との力強いメッセージを頂きました。

本研修を通じて、世界のスポーツ界を支える若者たちの育成のため、仙台大学が科された使命感の大きさを改めて実感することができました。

また、学生たちからは本研修を通じて、「英語や海外の文化、生活様式の違い、さらにはATに関する取り組み等について深い学びを体験することができました。今後ライセンス取得へ向け、インターネットを活用しての遠隔授業やアドバンス研修などへ意欲的に取り組みたいです」との意気込みが報告されました。



2月28日ハワイ報知社にて

○平成30年度 ハワイAT研修ビギナーコース参加学生

グループ①リーダー	金子 茂紀 (体育 秋田)	藤本 樹 (体育 宮城)
	大久 勇樹 (体育 宮城)	長内 杏衣 (体育 青森)
	野ヶ本早芳 (体育 静岡)	
②リーダー	塩田 浩貴 (運栄 青森)	千葉 右太 (体育 宮城)
	石村 颯太 (体育 青森)	星 周根 (体育 宮城)

<報告：江尻雅彦教授>

担当：浅野勝成助手

「今日のラントレ（ランニングトレーニング）はキツイですか？」。ちょっと前に選手からよく耳にしていたフレーズです。極めつけは会った際の挨拶代りに「今日キツイですか？」、まるでパブロフの犬のようです。

苦痛なことは可能な限り避けたいという気持ちは分かりますし、聞いてくる心情も理解できます。しかし大抵の場合は「キツイよ」と答え、その後に「キツイと思ってしまえばキツイ。出来ないと思ってしまえば出来ない。負けると思えば負ける。どうせトレーニングは行うのだからネガティブ思考ではもったいないよ」と言います。ですが、ただ「ポジティブ思考でいなさい」と伝えるのも中途半端です。

セット数やレップ数などの回数はトレーニング前に決めており、選手にも伝えます。それはラントレでもウエイトトレーニングでも同じです。ラントレを10本行うと決めたら絶対にそれ以上増やさないこと。終わりが分からないことは「キツさ」に繋がります。予め本数を把握していれば、10本のみだから一本一本は全力で行おうと考えることが出来ますし、トレーニングの質も上がります。選手個人やチームの雰囲気がポジティブになるための工夫は大事です。もちろん、ポジティブな雰囲気を作り上げることがトレーニングの目的ではないですが、身体強化という目的を達成するための一つの工夫と捉えています。

もう一つの工夫は、選手達がギリギリ越えられそうな強度や量を設定すること。選手の耐久性を凌駕する程の強度や量は、身体的でなく心理的にも負担が大きいです。ギリギリの所を設定し、選手達がそれを達成する。達成感を得られることで次も挑戦しようとする。そうするとチーム全体の雰囲気が良くなってくると思います。ポイントは漸進性過負荷で、身体的にも心理的にもとても重要な原則と感じます。

上手くいけば各選手がリーダーシップを持って、トレーニングに挑戦しようという良い雰囲気がチーム内で作り出せます。それが出来れば、身体強化にも好影響を及ぼします。そこへ持っていくための前提として各選手やチーム事情を知ることが必要ですが、週1-2回のトレーニングでそれを把握するのは難しいです。従って、積極的に競技練習の見学に向いて、選手や監督とコミュニケーションを図ることが重要と感じています。練習見学時には、どのようなプレーや動き方をするのかという技術的・身体的な面のみでなく、表情や仕草、言動などから心理面の観察も心がけています。

次回はFreshman Entrance Screening (FES)について（担当：白坂）

「平成30年度(後期)健康づくり運動サポーター認定証書授与式」を開催しました

3月15日(金)に健康づくり運動サポーターの認定証書授与式を開催しました。今回は平成30年度後期の資格認定評価会で認定された初級21名、中級4名、上級4名に対して認定証書が授与され、今回の認定者を含めこれまで延べ595名が本資格を取得してきました。

中級を取得した宋秉臻さん(大学院2年)は「友人と楽しく活動することで、人前で話すことが怖くなくなりました」上級を取得した忠鉢礼菜さん(大学院2年)は「みんなの協力があって上級を取得することができました」引地あゆみさん(健康福祉学科4年)は「上級実習を通して、人と話す楽しさ、指導の大切さを知りました」鈴木萌子さん(健康福祉学科4年)は「4月から社会人となるので、上級実習で学んだことを活かしたいです」四日市綾香さん(運動栄養学科4年)は「活動を通して、長所を伸ばし短所を改善し、新しい自分を見つけることができました」と学生が今後の抱負を述べてくれました。

この資格取得には、全10回の講義受講と地域の運動教室での現場実習や指導実習、上級の場合には、地域での健康イベントの企画立案・準備・実施・結果報告まで行うことが必要となります。実際に地域の方々と関わりながら学生はコミュニケーション能力や指導力、ホスピタリティを身に付けます。

多くの学生がこの活動を経験し、「安全に」「元気よく」「楽しい」運動指導のできる実践力を身に付け活躍できるよう今後もサポートして参ります。

<田中亨新助手>



今回認定された学生と教職員で記念写真